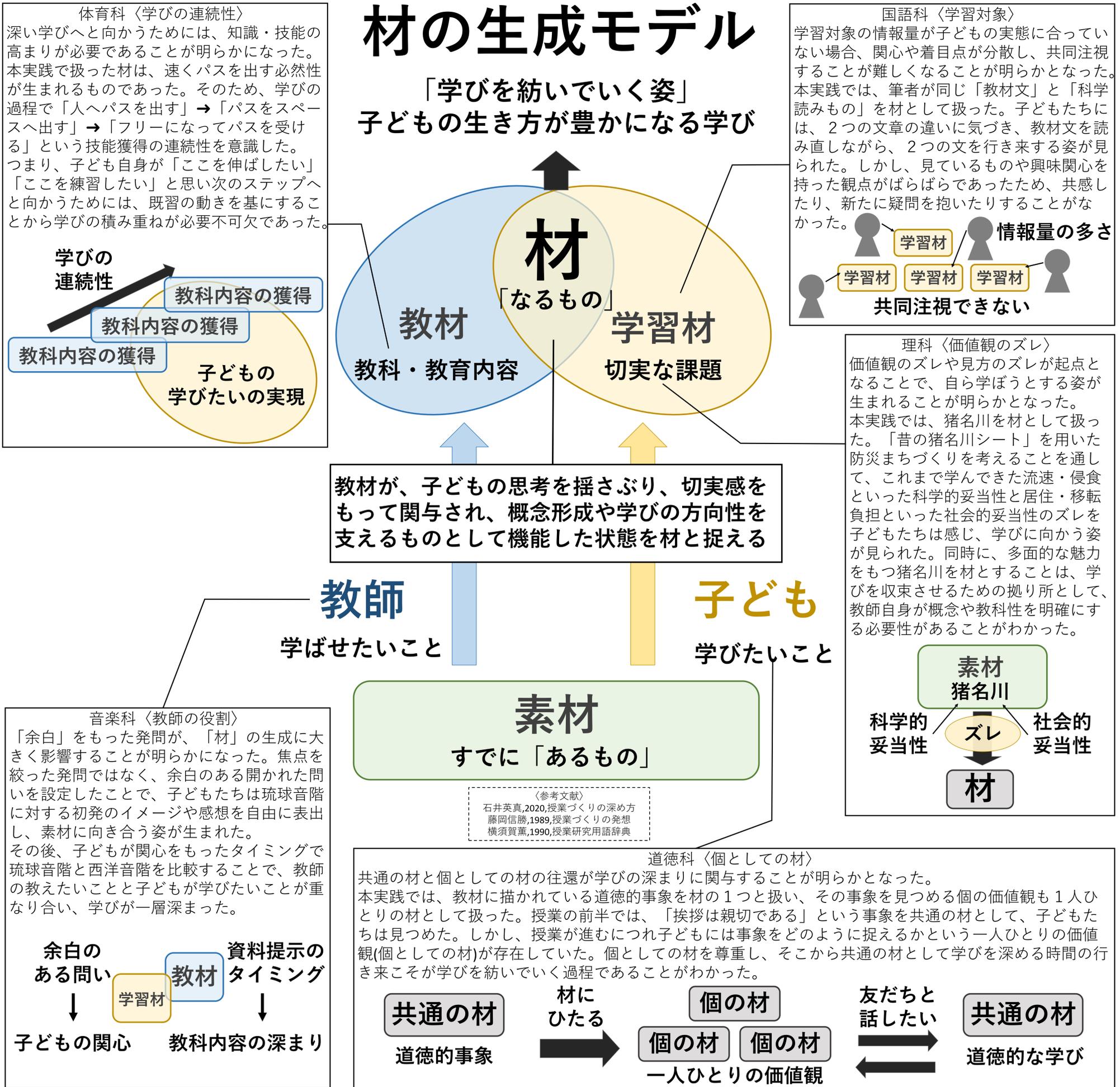


〈材〉を介した本質的な学びの探究 対話的実践における教師の省察と変容プロセスの質的分析

【研究背景】
近年の教育現場では「主体的・対話的で深い学び」への転換が求められている。昨年度の研究では、教師間での「学び」概念の共有や、学びの深まりを評価する枠組みの欠如が課題として浮き彫りとなった。本研究では、「学び」において活動の楽しさが先行しがちな現状を批判的に捉え、子どもの問いや意味創造を媒介する「教材（材）」の機能に焦点化する。これは「個別最適な学び」への転換や伝統的教材論への回帰ではない「第三の道」として、次期学習指導要領が目指す「概念的理解」に基づく本質的な学びの在り方を究明するものである。

【研究方法】
本研究は、小学校における授業実践の文脈を基盤とした質的研究である。教師が授業実践（「材」をどのように捉え授業を行うのか）を通じていかに「学び」概念を構築し、自身の教育観を省察的に変容させていくのかを、実践記録および共同検討会での対話的記述に基づき分析する。



【総括】
本研究では、「主体的・対話的で深い学び」を成立させる媒介としての「材」の機能に焦点を当て、各教科の授業実践を通して「材」の生成条件と学びの成立過程を検討した。その結果、「材」はあらかじめ固定された教材ではなく、子どもの関与、教師の働きかけ、教科性との接続の中で生成される動的な存在であることが明らかとなった。各教科の実践から明らかになった点は以下の通りである。

- ・学習対象の情報量が子どもの実態に適合しなければ関心が分散し、共同注視関係が成立しない。
- ・教師による「余白」をもった発問や情報提示のタイミングが子どもの関心を引き出し、子どもの学びたいことと教師のねらいを接続することで「材」が生成される。
- ・価値観のズレが学習の契機となり、学びへの切実性を生み出す。
- ・知識・技能の積み重ねによる学びの連続性が、子どもが次の課題を見だし主体的に追究する基盤となる。
- ・個別的関与と共同的追究の往還が学びの深化に関与する。

以上のことから、「材」は子どもの問いや意味創造を媒介するものであることが明らかとなった。したがって、本質的な学びは、子どもの関与を尊重するだけでも、教科内容を一方向的に教授するだけでも成立するものではない。子どもの実際の関わりを見取りつつ教科性へと方向付ける教師の調整によって成立するものである。

【今後の課題】
本研究では「材」の生成条件と機能を明らかにしたが、実践事例は限定的であった。今後は、「概念的理解」に基づく本質的な学びの在り方を究明するためにも、より多様な教科・学年における実践を蓄積し、「材」の生成過程と教師の調整の在り方について、さらに検討を深める必要がある。